

新史 太閤記

後編

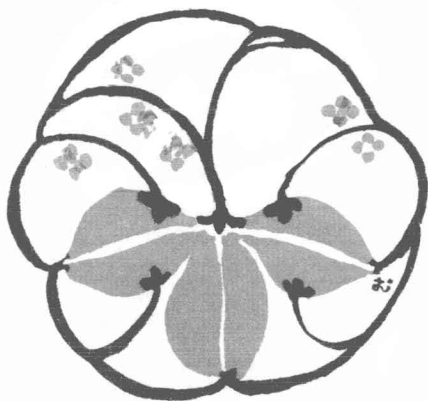
司馬遼太郎



太閤記

後編

司馬遼太郎



新潮社

新史 太閤記（後編）

昭和四十三年三月三十日 發行
昭和四十七年九月五日 十二刷

定価五五〇円

著者 司馬遼太郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話（〇三）一一一一

振替 東京八〇八

印刷所 石橋印刷株式会社

製本所 大進堂製本所

落丁本はお取替えいたします

目次

禪 高……………七

高 松 城……………三九

変 報……………七〇

瀬 兵 衛……………一〇二

勝 家……………一三二

羽 柴 少 将……………一六五

紀 之 介……………一九五

大垣……………二二五

賤ヶ岳……………二五五

政略……………二八五

家康……………三二一

尾張戦線……………三三七

狂言……………三六七

装
幀

村
上

豊

新史
太閤記
(後編)

禪 高

藤吉郎のうけもつ播州の城々の攻防戦の技術に、多分にヨーロッパ風の色彩が加味されてきた。藤吉郎のモダニズムというより、これは時代によるものであらう。

げんに、毛利方もそれを採用している。藤吉郎方に加担している上月城を毛利方が攻めたとき、巨大な攻城用の移動楼があらわれ、その楼上に台無砲たいなしほうという南蛮渡来の攻城砲をのせ、城内にむかってうちこみ、このため城の櫓やぐらはつぎつぎと破壊され、それが落城の直接原因になった。

藤吉郎のほうも敵方の神吉城かんきを攻めるにあたってこの方式をさらに大規模にし、車輪のつかぬ移動楼をたかだかと二基組みあげて城内を見おろし、楼上から大砲（大鉄砲）をうちかけ、そのあいだに人夫を前進させて堀をうめさせ、さらに諸国の鉾山から坑夫をあつめ、城の根もとに穴を掘り、地下道をつくって地底から城内に攻め入ろうとした。もはや城攻めというより、土木工事であらう。

天正中期の日本人の意識は、このあたりを軸にしてかわりつつあるらしい。それまでの城攻めといえどひたすらに寄せ手の流血と白兵の勇氣にのみたよっていたが、思想があきらかに転換した。その推進者は、信長である。

——南蛮ではそのようにしているらしい。

と信長はそのことに好奇心をもち、宣教師に対面してはそれらのことどもをあくなく質問し、その実用的関心から自分の文明思想を変えようとした。変えた者が時代のあたらしい勝利者になるということを、信長は敏感に察していた。

知恵の源泉は宣教師たちであった。

「地球がまるい」

という、ヨーロッパで成立してほどもない新概念も、信長は極東にいながらそれを知識にすることができた。

「それは、なぜだ」

と、この天性の合理主義者は、しつように質問し、なっとくするまで質問をやめない。宣教師たちは、前世紀のおわりにあらわれた天文学者トスカネリの仮説を説明し、それを航海によって実験したコロンブスの冒険を説かねばならなかった。コロンブスが最初の冒険的航海にのりだしたのは、信長の舅の齋藤道三が京の郊外でうまれた翌年であり、遠いむかしのことではない。

「雷がなぜおこるか」

ということも、宣教師は説明した。この種の科学的な話題が日本人のもっとも感動するところであることを、かれらは、最初の日本上陸者であるフランシスコ・ザヴィエルの経験で知っており、当然、信長も膝をうってよろこんだ。まず宣教師は琥珀（こはく）をとりだし、それを絹で摩擦することによって電気をおこし、その電気の理から説きおこした。

琥珀は、ギリシア語でエレクトロンと申しますが、と宣教師はいう。琥珀だけでなく万物は摩擦によって電気をおこしますが、その万物のなかでも琥珀がもっとも現象あきらかなるゆえ、こ

の現象のことをエレクトリシティと申します。雷も、空中における電気現象でありましよう、というのである。その「空中」という概念を説明するために空気存在を説き、風がなぜおこるか、ということもかれらは信長に語った。

信長は望遠鏡の原理も知り、虫めがねの原理も知った。かれはかれら南蛮人の新知識をよろこび、その保護者になり、京都や安土城下に教堂や学校、南蛮人住宅をたてることをゆるした。その一群の南蛮建造物のある場所を、

「大白」

と織田家の家中の者はよんだ。造物主のことであらう。この地名は、信長死後四百年のこんにちものこっている。

信長の思想——とくに軍事思想は、かれと体質的にあうヨーロッパの知恵を得て大いに充実したが、しかしただ神の存在を信ずるというもつとも重要な一点で疑問をもち、あたまから信者にはなろうとしない。

さて、藤吉郎である。

播州三木城を包囲中、かれの謀士の黒田官兵衛が自分がカトリック信者であるためにそのことを質した。

「あなたも、キリシタンになられては？」

ということであつた。

官兵衛は、伊丹城における牢獄生活のあと跛者になつたが、体力はおもつたより早く回復し、その後すぐ三木包囲陣にくわわり、従前どおり藤吉郎の主任参謀として立ちはたらいっている。

「妙だ」

と、藤吉郎はまるで小娘のような陽気さでいった。なにごとく陽気に、弾みをつけてものをいうのがこの男のくせであり、この主将の陽気さが全軍にひろがって士気をいきいきさせていることも、この男は十分に知っていた。

「なにが、妙で」

と、官兵衛も笑いながら反問した。

「妙ではないか、いまさら。……わしがいままで日本の神仏にも凝ったことのない男だということをおことはそばにいて知っているくせに、なぜ南蛮の神を信ずることをすすめる」

「南蛮神は」

官兵衛はいった。

「ちがいますな」

「そうだ、ちがう」

その点は、藤吉郎もみとめていた。日本の神仏とはちがっている。なぜならばあたらしい攻城法ももっているし、蚕以外の動物から目のさめるように華やかな絨製品をつくることも知っている。遠眼鏡もかれらのものであり、万里の波濤をこえてこの国にやってくる巨大な帆船も、その宗旨のものであった。かれらのいうには、その宗旨の神を信ずればそのような絢爛たる知恵がつくという。兩人が、日本の神仏とはちがう、といったのはそのことであつた。あとの教養そのものは石山本願寺が宣布している宇宙唯一神の阿弥陀如来のおしえとあまりかわらない。

「官兵衛は、努力家だな」

「なぜです」

「それほどの知恵者でありながら、そのうえなお知恵をつかせようとおもってキリシタン宗徒に

なつたのか」

「左様……でありましようかな」

官兵衛は、苦笑した。本音はそうにちがいない。官兵衛だけでなく荒木村重や大友宗麟など知恵に対してどんなんな向う的性格の連中があらそつてこの宗門に入つたのは、この宗門の背景にあるあたらしい文明を知ることによつて宇宙や世界の原理を知り、それを知ることによつて自分の発想力をゆたかにしようとしているのであろう。でなければ、すくなくとも官兵衛のような男は入信はすまい。

官兵衛は、自分の馬前に、十字架をかたちどつた馬印（うまじるし 將のしるし）を立てていたが、それも信心のためではなく、自分の知恵を敵味方にむかつて誇示しようとするささやかな伊達趣味であらう。ところだ。

——なぜあなたは入信なさらぬ。

と官兵衛が藤吉郎にきいたのは、ふとそういうことを訊きたくなるような評判が藤吉郎にはあつたのである。

去年の五月、いわゆる安土宗論のときである。この宗教討論は、信長の文官で日蓮宗の僧侶でもある朝山日乗が信長に対しキリシタンを禁教すべきことを説いたとき、信長が、

——されば、汝わが前で討論せよ。

と命じたことからおこつた。日乗の相手は耶蘇やそ会師父のペール・フロエーと日本人の修道士ロレンスであつた。この討論で日乗はロレンスのために迫いつめられ、ついに、

「汝らの靈魂とはなにか。ここでみせろ」

とまでさわざだし、

「見せられぬとあれば、その首を切っておれが汝の靈魂を見てやる」

と逆上のあげく、信長の面前であることをわすれ、隣室へ駆けて行って刀をつかみ、座にもどろうとした。

たまたま藤吉郎が一座のなかでひかえていたが、袴を蹴って機敏に行動し、日乗に抱きついてその刀をとりあげた。そのとき藤吉郎は、

「上人、気をしずめられよ。上様の御前である。それに宗論をなしてついに刀をひきぬいたとあれば、仏僧のはじは末代にまでつたわってしまう」といった。天正七年五月二十七日のことである。

いわば、藤吉郎は宣教師を救った。この行動は安土や京の信者のあいだで評判になり、

——羽柴どのも、神のみおしえを聴こうとなされているのではないか。といううわさが立った。

その評判ももつともであつたかもしれない。その座にいた反キリシタンの明智光秀や丹羽長秀は黙然として座を立たず、あれくるっている日蓮僧の手でふたりの師父が殺されるのをむしろ期待しているかのごとくでさえあつた。藤吉郎がとっさに立つて日蓮僧を制止したのは、かれのキリシタンへの好意によるものである——とみるのは当然であらう。

官兵衛は、その評判をきき、ことさらにその点をきいてみたのである。

「好意はもっている」

藤吉郎は即座にこたえた。

「しかし、わしはだめだ」

「なぜです」

「こいつ」

藤吉郎は、官兵衛の背をどやしつけた。

「わかつているくせに」

といったのは、女の点であった。藤吉郎はなによりも女を好み、度を越えている。キリシタンでは一夫一婦を強制するという。十戒の第六条に「汝ら、姦淫するなかれ」という箇条があり、性欲の統御についてやかましい。藤吉郎がもしいま入信するとすれば、播州姫路城や近江長浜城や安土屋敷などにかこっている想い者たちを召し放たねばならず、それをするくらいならかれは死んだほうがましだとおもっている。

「上様はいかがでしょう」

と、官兵衛はいった。信長がなぜ入信せぬのか、ということだった。藤吉郎は、その愚問に笑いだした。

「あの御方は、べつだ」

信長の精神は、自分のわくさえつくらずにつねに自由に息づいている。あの人物が、他人のつくった教条に身をしばられるようなことは想像もできないし、想像するだけでもこっけいであり、信長自身一瞬もそれを望んだことがないであろう。

（おれも、おなじだ）

藤吉郎はひそかに、信長の器量よりも自分のほうがひと桁^{けた}大きいようにおもっている。しかも信長同様その着想にわくなどはなく、その発想法はいつの場合も鳥の翔^かけるように自由であり、自由であらねばこの時代の敗北者になると藤吉郎は考えている。キリシタンという、窮屈なわく内に入るなど、かれにとってとんでもないことであった。

(しかし)

と、藤吉郎は、キリシタンについていつも考えている。かれらがもたらしてくれる西洋の文物ほど、藤吉郎の思考を解放し、さまざまに刺激してくれるものはない。

藤吉郎は播州の城攻めにおいてこの国の城攻めの歴史を変えた。藤吉郎の独創ではあったが、その独創をうむ刺激になったのは、信長を中心とする時代のあたらしい思潮であろう。

かれが足かけ三年にわたって包囲しつづけた播州三木城も、この年（天正八年）の正月十七日ついに落ちた。

なにしろ山野に巨大な牢をつくり、城と城兵そのものをごっそりと入れこんでしまうような攻城法であった。城のまわりを、付城、望楼、柵、鹿柴でもって十重二十重にかこみ、道路を遮断し、海上を封鎖し、攻囲軍は牢番のようにうごかず、城へ手出しもせず、城そのものを干し枯らしてしまふ方式であった。

「こんなばかな城攻めは見たことも聞いたこともない」

と、この方法は古い侍たちのあいだでさんざんな不評であった。城攻めというのは侍の勇気の試金石であり、血が流されてこそ合戦のもつはなやかさもあり、武者たちの功名手柄のたねにもなるのだが、この方法ではたれも血を流す必要がなく、そのかわりどのように逸つても手柄をたてる場所がない。

攻められている城側も、死傷者があまり出ない。そのうち兵糧が尽き、士気が萎え、体力も尽きてくる。最後には飢えのために城そのものもちこたえられなくなり、終戦の体面のみを考えるようになってゆく。三木城のばあい、藤吉郎はその時期を察し、城主別所長治に礼をつくして降伏を勧告した。「貴下と重臣のみ切腹されれば城兵の命はことごとくおたすけ致す」というこ